

跳び箱運動における技能向上のための授業の工夫

－「支持」「逆さ」の局面に注目して四足歩行等の活動をどう取り入れるか－

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 後藤真一

1. 本稿の課題

本稿は、「支持」「逆さ」の局面に注目して4足歩行等の活動をどう取り入れるかに焦点を当て、中学校保健体育科における跳び箱運動における技能向上のための授業の工夫について報告する。跳び箱運動に向けた動きづくりの運動は、第42集「体育授業のモデル集 その7」小学校・高学年（跳び箱運動）（平成25年3月発行）に見られるように、うさぎ跳びに始まり様々な動きの工夫がされている。その中でも筆者は、技に関連した易しい動きと開脚跳びに繋がる運動の動きの一部を参考にし、特に開脚跳びにおいて必要な要素となる動きを選別し、3時間の授業（表2）で、第2学年(36名)の授業実践を行った。その実践の成果と考察を、事前質問・事後質問と授業記録によって報告する。

4足歩行と開脚跳びは次のような関係にある。第42集「体育授業のモデル集その7」小学校・高学年（跳び箱運動）（平成25年3月発行）を参考に述べれば、4足歩行の運動は頭より腰が高くなるといった点が挙げられている。そのため、手で体を支え、腕を使い前進するという動きになる。この運動では頭が腰の位置よりも低くなるため、前傾姿勢となり重心が前にいく。その際に重要な点として、自己の体重を腕で支えるということが大切になる。4足歩行の重要な点は開脚跳びにおける着手から第2空中局面において共通していると考えられる。そのため本研究では、「支持」「逆さ」の局面に注目して開脚跳びと4足歩行等の動きとの関連を生徒が考え、気づかせるような発問を行い、開脚跳びに向けた段階的な授業を行った。

学習指導要領（2017、p.63）に記載されている器械運動の第1学年及び第2学年の目標の中に、その技ができる楽しさや喜びを味わう

ことのできる運動であると記載されている。しかし、技ができるためには技に向けた段階的な指導が必要不可欠であるが、その段階的な指導の際に生徒になぜその動きをさせるかという理解がなければただやらされるといった指導となる恐れがある。そのため、技に向けた動きの関連性を生徒に理解させる必要がある。さらに、岡橋隆（1994）は「問題の設定に器械運動の授業では、何を生徒に学習させよければよいのかということが浮き彫りにされてくる」と指摘している。この点も課題として今回の授業づくりに取り組んだ。

2. 指導案の概要と要点

本単元は表1のように全単元の9時間による構成である。そのうちはじめの1-3時間を私が担当し、授業実践を行った。またその後における4-9時間はクラス担任が行った。

本章ではその3時間の指導案の概要と要点を表1に示す。

【表1】本単元9時間の内容と構成

1	「オリエンテーション」
2	跳び箱に慣れるための動きづくり：「支持」「逆さ」の局面の関連性を4足歩行・カエルの足打ち・カエル跳び・3or5歩ジャンプの動きから見つける。
3	跳び箱に慣れるための動きづくり・開脚跳び：「支持」「逆さ」の局面の関連性⑦マットの上で前転・⑧カエル跳びから前転・⑨「カエル跳び」・開脚跳びから見つける。
4	跳び箱に慣れるための動きづくり・開脚跳び・台上前転
5・6	開脚跳び・台上前転・発展技

7・8	発表に向けた練習
9	発表会

次に、1～3時間（表1）の授業内容の展開部分における概要を表2に提示する。

【表2】「1～3」時間の指導案の展開部分の概要

【1時間目】	開脚跳びの中に「支持」「逆さ」を見つける
	「オリエンテーション」①「学習の約束」
	「オリエンテーション」②「支持」「逆さ」「回転」とはどのような動作なのか理解する（教師：開脚跳び実演）。
	発問① ：開脚とびの中に「逆さ」はどこにあるか。
	「体づくり運動」：4足歩行
	発問②-1 ：4足歩行の中に「支持」「逆さ」はそれぞれありますか。
	発問②-2 ：日常の動きの中に「支持」はあるか。 ：日常の動きの中に「逆さ」はあるか。
【2時間目】	各種運動(4足歩行)←「支持」「逆さ」→開脚跳びの関連性を見つける
	開脚跳びにつながる基礎となる動きの学習
	㉞「4足歩行」：4足歩行のどこに「支持」「逆さ」が関わっているかを確認しながら行う
	㉟「カエルの足打ち」：カエルの足打ちのどこに「支持」「逆さ」があるか確認しながら行う
	㊱「カエル跳び」：かえる跳びのどこに「支持」「逆さ」が含まれているか確認しながら行う
	㊲「3or5歩ジャンプ」：3or5歩ジャンプのどこに「支持」「逆さ」が含まれているか確認しながら行う
【3時間目】	授業の流れ及び発問
	㉟マットの上で前転：どこに「支持」「逆さ」「回転」が含まれているか確認しながら行う
	㊱カエル跳びから前転：どこに「支持」「逆さ」「回転」が含まれているか確認しながら行う
	㊲手押し車から前転どこに「支持」「逆さ」「回転」が含まれているか確認しながら行う
	発問①-1 ：手押し車から前転の中に、「支持」はここにあります。「逆さ」はどこにあるか。
	発問①-2 ：手押し車から前転の中には、「支持」「逆さ」

	さ」、そして「回転」が入ります。「回転」するとき、手以外の体のどこが最初にマットにつくか。
	開脚跳び：4足歩行などの動きの「支持」「逆さ」と開脚跳びに含まれている「支持」「逆さ」が関連しているか確認しながら行う

以上の授業内容の中で筆者が特に注意を払ったのは次の点である。まず、生徒に「支持」「逆さ」についての定義づけを行い、「支持」「逆さ」とはどの局面かを理解させることに留意して授業を行った。次に、生徒が4足歩行をはじめとする類似運動と開脚跳びとの関連性を見つけ、類似運動のどの部分において「支持」「逆さ」の局面が現れるかを考え行うことに留意させた。最後に類似運動と開脚跳びにおける「支持」「逆さ」の動きにおいて、関連性を理解し、開脚跳びを行わせるということに留意した。

3. 事前質問の内容・結果と考察

3-1. 事前質問の内容・結果

本章では、跳び箱運動を行うにあたり、生徒の実態を把握するために事前アンケートを実施した。集計した事前質問の内容と結果は表2の通りで、質問3・4については結果も記載している。質問1・2の結果は表3のようになった。これは生徒の回答を筆者が類別したものである。回答の理由については①好き②どちらかといえば好き③どちらかといえば嫌い④嫌いの2種類に分類して多かった回答を挙げている。（記述内容により重複している部分を含めている）

【表3】事前質問の内容と結果（3組：35/36名）

1	あなたは体育は好きですか？
	[23名] ①好き [10名] ②どちらかといえば好き [2名] ③どちらかかといえば嫌い [0名] ④嫌い
	上の回答の理由を教えてください。
	(1) [33名] (①あるいは②の回答者)の理由 ・[14名]：体を動かすのが好き。 ・[6名]：達成感がある ・[4名]：特定の単元が好き

	<ul style="list-style-type: none"> ・[4名]：気分転換ができるから ・[3名]：仲間と協力することが好き <p>(2) [2名] (③の回答者) の理由</p> <ul style="list-style-type: none"> ・[1名]：運動が不得意 ・[1名]：体育が不得意と思っているため
2	<p>跳び箱運動は好きですか？</p> <p>[7名] ①好き [12名] ②どちらかといえば好き [12名] ③どちらかかといえば嫌い [4名] ④嫌い</p>
3	<p>あなたが跳び箱運動で得意・苦手と感じる理由を記入してください。</p> <p>(1) [17名] (①あるいは②の回答者) の理由</p> <ul style="list-style-type: none"> ・[10名]：跳ぶことができるから ・[4名]：技ができた達成感がある ・[2名]：跳ぶ感覚が好きだから ・[1名]：他者に褒められた時がうれしいから ・[1名]：その他 <p>(2) [17名] (③あるいは④の回答者) の理由</p> <ul style="list-style-type: none"> ・[11名]：けがやトラウマ、恐怖 ・[6名]：できないから
4	<p>開脚飛びには「支持」「逆さ」の動きが含まれています。それぞれ、開脚飛びのどこに含まれているのか、説してください。</p> <p>「支持」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・[29名]：腕や手で体を支え跳ぶ ・[4名]：わからない ・[2名]：ジャンプ時 <p>「逆さ」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・[22名]：わからない ・[4名]：足の開き ・[3名]：手と足の位置 ・[2名]：腕や頭の位置 ・[2名]：踏み切りのとき ・[2名]：回答無し

3-2. 事前質問の結果の考察

ここでは、事前質問の結果(35名)の質問毎の考察を行っていく。

(1) 質問1の内容をまとめると、[23名] ①好き、[10名] ②どちらかといえば好きと合計33名が好きと回答している。また、[2名] ③どちらかかといえば嫌い、[0名] ④嫌いのという結果になりどちらかといえば嫌いが2名となった。

質問1の結果から、体育が好きで生徒の理由として、体を動かすのが好きや仲間と協力

することが好きと回答している。しかしどちらかという嫌いとは回答している2名の生徒に当たっては、運動が不得意であるという理由で嫌いとは回答している。①・②と答えた生徒は、体育における身体活動を肯定的にとらえていることが明らかになった。しかし、③答えた生徒から推測されたことは、運動ができないことが一要因として挙げられ、否定的な意見となったことから、段階的に何かしらの成功体験を経験させることが肯定的に体育を捉えることが可能であると推測する。

(2) 質問2の結果には次の点が示されている。

[7名] ①好き、[12名] ②どちらかといえば好きと合計19名の生徒が好きと回答している。[12名] ③どちらかかといえば嫌い、[4名] ④嫌いとは合計16名の生徒が嫌いという回答をし、約半数近くが嫌いという結果になった。この結果から体育において体を動かすことは好きだが、跳び箱運動においては嫌いと感じている生徒が多いということがわかり、日常的な動作を行わない運動だからではないかと推測することができた。

(3) 質問3の結果には次の点が示されている。

筆者が類別したものにおいて好きと答えた生徒の回答では、[10名]：跳ぶことができるから、[4名]：技ができた達成感がある [2名]：跳ぶ感覚が好きだから [1名]：他者に褒められたときがうれしいからという技能に関する記述や他者との関わりといった記述が書かれていた。逆に17名の内 [11名]：けがやトラウマ、恐怖や [6名]：できないからという心理面や技能に関する記述が書かれていた。

質問3の結果から跳び箱運動に当たっては、跳ぶことによる達成感が得られるからという回答に対し、恐怖やトラウマによる苦手意識が課題として挙げられた。このことから跳び箱運動における、段階的な授業を行い、恐怖心を少なくさせる取り組みが必要ではないかと推測する。

(4) 質問4の結果には次の点が示されている。

「支持」ではほとんどの生徒が [29名]：腕や手で体を支え跳ぶと回答している。残りの [4名]：わからない [2名]：ジャンプ時という少数の生徒が回答した。「逆さ」では [22

名]：わからないと半数以上の生徒が回答した。[4名]：足の開き [3名]：手と足の位置 [2名]：腕や頭の位置 [2名]：踏み切りのときという回答になった。[2名]：回答無しという結果になった。

質問4の結果では、「支持」については、腕や手で支えるという回答が多かったのに対し、「逆さ」についてはわからないという回答が多かった。このことから、生徒の意識の中に開脚跳びにおける「逆さ」が含まれていないということがわかる。

以上のように事前の状況として、体育が好きな生徒多く、ほとんどの生徒が①・②という回答であった(質問1)。また、①・②という回答をした生徒においては学習指導要領にもあるように、体を動かす楽しさや心地よさといったことを経験していることが回答(質問1)でわかった。しかし、跳び箱運動については半数近くの生徒が③・④という回答するという結果(質問2)になった。理由としては、初等段階における跳び箱運動からのけがや恐怖心があるということやできないという生徒からの記述も見られた(質問3)。

「開脚跳び」における動きに関する「支持」では、事前質問の段階においてほとんどの生徒が動きに対しての共通理解があるという結果(質問4)になった。しかし「逆さ」に関する質問においては、約半数がわからないと回答し(質問4)、ほとんどの生徒においても共通の理解がされていないという結果になった。

4. 授業記録とその考察

4-1. 1時間目の発問①(表4)の授業記録

本章では、1~3時間の各発問における生徒の反応を考察していく。1時間目の発問①(表4)における生徒の反応については授業記録を提示して考察する。その記録は表4で、筆者が特に注目したところには下線を引いている。

[表4] 1時間目の発問①の授業記録

—発問からのやり取り—

T：開脚跳びの中で「逆さ」の局面がありますが、それを見つけてください。

T：今からやる技は開脚跳びです
～実演～

C：逆さって何。

T：では、先ほど聞いた「逆さ」の局面は「これだよと思う人」

C：しーん

T：なかなか難しいよね。では、班で1分話し合いをどうぞ

C：1班：開脚するときの足が逆さ。

C：2班：跳ぶこと自体が逆さ。

C：3班：突き放しの位置が逆さ。

C：4班：手をついて離すまでが逆さ。

C：5班：手をつく位置が跳びきるときに逆さになる。

C：6班：跳んだ時に手よりも体が前に行くところ

T：ヒントは、お尻の位置がどうなっているか。班ごとにもう一度確認をしながら話し合ってください。

C：もう一度してください。先生もう一度してください。

T：では、もう一度おこなうのでお尻の位置を確認してください。

C：ざわざわ...

T：では3、4、6班に発表してもらいます。

C：3班：跳んだ時に「お尻のほうが頭より高くなる。

C：4班：跳んだ時に頭よりお尻が高い位置にある。

C：6班：同じです。

—以下省略—

4-2. 授業記録(表4)の考察

(1) 発問①に関する考察

授業実践(近藤良太、2020)においての、体育の授業に関する報告を見ると、授業でどのような発問を出したのか、それに生徒はどのような反応をしたのかがわかる授業記録がみられない。特に授業における生徒の反応がどのようなであったかの報告がなされていない。そのため、本研究の教師と生徒のやり取りとして1時間目の展開部分で行った発問①により、生徒が

技能向上のために主体的に働きかけを行ったと思われる、授業記録について [表 4] にまとめた。筆者が特に注目したところには下線を引いている。

表 4 についての生徒と教師のやり取りでは、特に生徒が自主的な行動を起こしたとみられた 1 時間目の発問①について述べていく。

生徒の反応として、「逆さ」という言葉に反応をしていた様子が見られた。発問①を行った後、少数の生徒に「逆さ」についての説明をもらい、実際に筆者が開脚跳びの実演を行った。実演後に再度、生徒に「逆さ」の局面についての問いかけを行った。しかし、この時点では「逆さ」の局面を見つけることが出来なかった生徒や、自身のなさそうな生徒が見られた。一度、班ごとに考えを共有する時間を 1 分間つくり代表者に発言をしてもらった。生徒の発現からは様々な発言がされ、「逆さ」とは何かと戸惑っている様子が見られた。この様子から助言として、お尻の位置に着目するよう筆者が働きかけを行った。すると、ある生徒から「もう一度行ってほしい」という発言が見られた。その後、再度実演を行った。実演後、生徒たちの反応が変わり、あー、なるほどといった何かを発見した様子が授業記録から、見取ることができた。

これは、『発問①：開脚とびの中に「逆さ」はどこにありますか』において、初めの段階において、生徒が知らない情報から、教師の助言：「頭よりどこが高くなっているか」の問いかけをきっかけに、もう一度してほしいといった生徒の自主的な発言を促すことができた内容である。その生徒の発言をきっかけに、他の生徒も観察をし、その後の班ごとの確認においても 6 班すべて、同じ回答となり、共通理解がはかられたと考えられる場面であった。再度全体で新たな気づきを共有し、生徒自ら理解を深めるための行動が見られた場面であったと考察する。

(2) 授業の考察

次に、表 4 で行った、跳び箱運動の 1 時間目における発問①を除いた残りの発問に対して

の生徒の様子について述べていく。

(1) 発問②-1: 4 足歩行の中に「支持」「逆さ」はそれぞれありますか。の発問では「支持」についてはほとんどの生徒が挙手をし、数名に説明をしてもらったが、答えることができていた。しかし、「逆さ」に関しては、挙手している生徒が少数であり、わからないと答える生徒がほとんどであった。この生徒の反応から開脚跳びの「逆さ」と 4 足歩行の「逆さ」との関係性を見つけられていないこと推測することができた。

(2) 発問②-2: 日常の動きの中に「支持」はあるか。: 日常の動きの中に「逆さ」はあるか。といった発問においては、雑巾がけをするときや物を拾うとき、靴ひもを縛るときといった一定の場面に見られる行動についての発言がみられた。しかし再度確認をしたところ日常生活においてその場面は少ないという発言も見られた。

5. 事後質問の内容・結果と考察

5-1. 事後質問の内容・結果

本章では、跳び箱運動を行うにあたり、生徒の授業後における生徒の変容を把握するために事後アンケートを実施し、変容を確認した。

集計した事後質問の内容と結果は表 5 の通りで、質問 2・3・4 については結果も記載している。質問 1・2 の結果は表 5 のようになった。これは生徒の回答を筆者が類別したものである。回答の理由については①好き②どちらかといえば好き及び③どちらかかといえば嫌い④嫌いの 2 種類に分類して多かった回答を挙げている。(記述内容により重複している部分を含めている)

[表 5] 事後質問の内容・結果

1	-1 あなたは体育は好きですか? [17名] ①好き [8名] ②どちらかといえば好き [7名] ③どちらかかといえば嫌い [3名] ④嫌い
---	--

	-2 開脚跳びと 4 足歩行との関係を知ることは <u>楽しい</u> と思いませんか？
	[12名] ①好き [15名] ②どちらかといえば好き [6名] ③どちらかかといえば嫌い [3名] ④嫌い
2	(2) 1時間目に行った 4足歩行 の動きは、どのような点で、 開脚跳び と関連していましたか？
	・[27名]:「支持」と「逆さ」の動きが関連していた ・[6名]:「支持」の動きが関連していた ・[2名]:「逆さ」の動きが関連していた
3	2時間目に行った カエル跳び と 手押し車 の際に気づいた重要な点を教えてください。
	「カエル跳び」 ・[11名]:「支持」と「逆さ」が動きの中に含まれている ・[13名]:「支持」が動きの中に含まれている ・[5名]:「逆さ」が動きの中に含まれている ・[3名]: 腕や足の引き込みが含まれている ・[3名]: その他
	「手押し車」 ・[13名]:「支持」と「逆さ」が動きの中に含まれている ・[15名]:「支持」が動きの中に含まれている ・[2名]:「逆さ」が動きの中に含まれている ・[3名]: 前転の際に台上前転に繋がる動きが含まれている ・[2名]: その他
4	これまで3時間で行った「 支持 」「 逆さ 」「 回転 」は跳び箱運動のどこに含まれていましたか？
	「支持」 ・[30名]: 手や腕で体を支えているとき ・[5名]: 踏み切りから着手時
	「逆さ」 ・[27名]: 手や腕で体を支えているとき ・[6名]: 跳んだ時の姿勢 ・[1名]: 回転時 ・[1名]: 腰の位置
	「回転」 ・[20名]: 台上前転の動き ・[8名]: 前転や跳び箱で回転するとき ・[4名]: マットや跳び箱につく順番(手→頭→背中) ・[1名]: 「逆さ」が起きたとき ・[1名]: 手の押しするとき ・[1名]: 回答無し

5-2. 事後質問の結果の考察

ここでは、事後質問の結果(35名)の質問毎の考察を行っていく。

(1) 質問1の結果には次の点を示されている。

①・②どちらかといえば好きと合計25名が好きと回答している。また、③・④と合計10名が嫌いという回答であった。質問1の結果から1時間目の授業の際に行った事前質問より、6名の生徒が好きと回答したことが明らかになった。

(2) 質問1-2の結果には次の点を示されている。

①・②と合計で27名が好きと回答している。また、③・④嫌いと回答した生徒は合計で9名が嫌いという回答であった。質問1-2の結果から、ほとんどの生徒が開脚跳びと4足歩行との関係を知ることは楽しかったということが明らかになり、開脚跳びに関連する4足歩行の学習を知ることは楽しいということが明らかになった。

(3) 質問2の結果には次の点を示されている。

大きく分けて3つの回答にまとめることができた。[27名]:「支持」と「逆さ」の動きが関連していた。とほとんどの生徒が4足歩行の動きの動きの中にある「支持」と「逆さ」が開脚跳びに関係しているといった回答を得ることができた。しかし、[6名]:「支持」の動きが関連していたと[2名]:「逆さ」の動きが関連していたといった結果から8名の生徒においては「支持」又は「逆さ」のどちらかだけの回答という結果になった。このことから、3時間の授業であっても4足歩行の動きにおいては、開脚跳びとの関係が生徒の中で見出すことができた動きであるということが明らかになった。

(4) 質問3の結果には次の点を示されている。

「カエル跳び」では、[11名]:「支持」と「逆さ」が動きの中に含まれていると11名が動きの中に「支持」と「逆さ」の関係を確認し

ながら行っていた。また、「支持」「逆さ」が動きの中に含まれているでは、生徒の考えでは、どちらか一方の要素を動きの中で関連していたことを理解していた。

「手押し車」では、13名が「支持」と「逆さ」が動きの中に含まれている。「支持」が動きの中に含まれている。もしくは、「逆さ」が動きの中に含まれているでは、15名及び2名の合計17名の生徒が動き中に「支持」と「逆さ」のどちらか一方が含まれていると回答し、ほぼカエル跳びと同じ結果になった。また、台上前転の際に関係する等といった記述をした生徒も少数見られた。質問3の結果では「カエル跳び」と「手押し車」の動きにおいて、ほとんどの生徒が「支持」と「逆さ」を確認し、少なくとも「支持」もしくは「逆さ」の動きのどちらかを確認しながら「カエル跳び」と「手押し車」を行っていたことが明らかになり、技に向けての動きの関係を確認して行っていた。

(5) 質問4の結果には次の点が示されている。

「支持」では、30名が手や腕で体を支えている、5名が踏み切りから着手時という結果となった。事前質問と比較し、比較的、生徒が「支持」について関連性を見つけられた。

「逆さ」では、27名が手や腕で体を支えているとき、6名が跳んだ時の姿勢、1名が回転時、1名が腰の位置という結果となった。このことから開脚跳びにおいて関係を見つけることができたが「逆さ」の局面を体験できていない。

「回転」では、20名が台上前転の動き。8名が前転や跳び箱で回転するときに関係している。4名がマットや跳び箱につく順番(手→頭→背中)。1名が「逆さ」が起きたとき「回転」が技につながることや技の名称、どのような流れのことをいうかといった回答結果となった。このことから生徒は「回転」と技の関係を思考している。

以上質問4の結果、跳び箱運動における技に向けた動きを行い、生徒が「支持」「逆さ」

「回転」の関係性を見つけられていることが、少なくとも示されている。

6. 本稿の総括

以上本稿では、「支持」「逆さ」の局面に注目して4足歩行等の活動をどう取り入れるかに焦点を当てて、中学校保健体育科における跳び箱運動における技能向上のための授業の工夫について報告してきた。事前事後質問の内容・結果及び授業記録の考察から、ほとんどの生徒が4足歩行等の動きに含まれる「支持」「逆さ」と開脚跳びにおける「支持」「逆さ」の関係性を確認することが出来ていたということが示された。本授業のねらいとして、「支持」「逆さ」の局面に注目して4足歩行等の動きと開脚跳びの関係性を生徒に気づかせるような発問を行い、生徒が開脚跳びに必要な要素を確認させることであった。

今回の授業において、開脚跳びに向けた動きでは、ほとんどの生徒が4足歩行等の動きと開脚跳びの関係性に気づき、必要な要素を確認できていたということが成果として指摘できたと思われる。また、ほとんどの生徒が開脚跳びと4足歩行等の動きによる関係を知ることは楽しいという回答をしたため、開脚跳び以外の技においても同じような結果となるのではないかと示唆された。

授業記録にあたっては、(表4)で生徒と教師とのやり取りを示し、発問による生徒の主体的な行動を促すことができた。発問①の後におこなった助言をきっかけに、生徒が主体的に行動を起こし、その後の気づきにつながることを示された。このような発問を行うことにより生徒の授業理解がより深まると思われる。

以上の取り組みを踏まえて、事前・事後質問では跳び箱運動における生徒の傾向及び今回の目的をいくらか達成できたと思われる。跳び箱運動を含む器械運動では、特にできる・できないがはっきりとする運動であるため、段階的な指導を行い、生徒にできるやできたという、自信や達成感を味合わせるということがやはり大切ではないかと考えられる。さらに、生徒にどのような関わり方をさせ、授業を充実させるかということが重要であると考えられた。

<参考文献>

- ・文部科学省(2018)「中学校学習指導要領(平成29年告示)、東山書房 p.63
- ・学校体育指導資料：茨城県教育委員会 第42集(平成25年3月発行)「体育授業のモデル集その7」小学校・高学年(跳び箱運動)
- ・岡本隆 静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)第26号(1995.3)p.179-190 学校体育における器械運動の特性に関する一考察
- ・古川 聖(H25.教育実践研究報告書)「わかる・できる」を目指した体育授業の実践
- ・文部科学省 第二章全国体力調査によって明らかになったこと (p.17)
- ・三浦忠雄・大山智子(1989) 跳び箱運動の着手技術に関する指導方法論的研究
- ・大久保 樹(2019) 中学校保健体育科の指導における「できた」がわかる体育の授業づくり—器械運動「跳び箱」を通して—(本研究の成果と課題. p.6-5
- ・近藤良太(2020) 跳び箱運動の技能を向上させる体育の授業～技の構成要素に着目した指導を通して～(p.1)